

依頼の接触場面における 母語話者の言語調整の特徴

筒井千絵

✦要旨

非母語話者とのコミュニケーションにおいて、母語話者には相手の言語能力に応じた適切な言語調整が求められる。しかし、対人的配慮に重点が置かれる依頼の場面では、丁寧さを重視するため発話は曖昧・婉曲になりやすい。そこで、本研究では、日本語母語話者がその背景、特に日本語教師か否かによって、わかりやすさと対人的配慮のバランスをどう調整して非母語話者とコミュニケーションを行うかを、ロールプレイの依頼の接触場面を設定し、分析した。その結果、日本語教師でなく、特に日常的に非母語話者との接触が少ない母語話者は、わかりやすさより対人的配慮を優先するのに対し、日本語教師は、対人的配慮よりわかりやすさに重点を置いて話す傾向があることがわかった。

✦キーワード

フォリナー・トーク、ティーチャー・トーク、依頼場面、わかりやすさ、対人的配慮

✦ABSTRACT

Native speakers must adjust their utterances when they communicate with non-native speakers who don't have the high language ability. When requesting something, we make a point of politeness therefore utterances can be vague. In this paper we set roll plays by Japanese native speakers and non-native speakers. And we analyzed how Japanese native speakers strike a balance between plainness and personal consideration. At result, Japanese native speakers with little contact with the non-native speakers put the higher priority on personal consideration than plainness, whereas native speakers, chiefly Japanese instructors who come in contact with non-native speakers give priority to plainness more than personal consideration.

✦KEY WORDS

Foreigner talk, Teacher talk, Request in Contact situations, Plainness of utterance, Personal consideration

The Features of Language Adjustment of Native Speakers in Contact Situations of Request

CHIE TSUTSUI

1 先行研究

国内の外国人住民の急増に伴い、集住地域を中心に公的機関においては言語サービスの多言語化が進みつつある(河原・野山2007)が、すべての情報を多言語化することは現実的には不可能であり、周囲の母語話者の日常的なサポートが必須である。特に日本語能力が充分でない非母語話者を対象とする際には、母語話者側は適切に言語調整をすることが求められる。しかし「適切な言語調整」とはどのようなものなのか。それを明らかにするためには、日本語のフォリナー・トークとティーチャー・トークの実態とその問題点を知ることが不可欠である。

フォリナー・トークとは、ある言語の母語話者がその言語能力が充分でない非母語話者に対して使用する簡略化された言語使用域のことである。日本語のフォリナー・トーク研究としては、スクータリデス(1980,1988)、志村(1989)、ロング(1992)などで、母語話者の調整傾向が記述されている。一方、語学教師が、学習言語の能力が充分でない学習者とコミュニケーションを図る際に用いる簡略化した言語はティーチャー・トークと呼ばれる。岡崎・長友(1991)、西原(1999)、前田(2006)などでは、日本語教師の学習者に対する言語調整は学習者にとって非常にわかりやすいとされており、一般母語話者の使用するフォリナー・トークと区別して考えられている。

しかし先行研究においては、フォリナー・トークはその現象の記述、ティーチャー・トークは日本語教師が身につけるべき技能という観点から別次元で述べられていることが多い。筒井(2008)ではロールプレイ実験を行い、非母語話者との日常的な接触度や関わり方の異なる母語話者が、非母語話者に対して同一の文書をどう説明するかを調査・分析した。その結果、非母語話者との接触が少ない人は辞書的な意味の説明を多く行うのに対し、日本語教師をはじめとする非母語話者との接触の多い人は具体化や例示を多く行い、情報の再構成の程度が大きいことがわかった。また、両者では非母語話者との会話において、「理解」と「印象」への配慮のバランスが異なることがわかった。

コミュニケーションにおいては「わかりやすさ」だけでなく対人的配慮も重

要である。よって本研究においては、対人的配慮がもっとも必要とされるロールプレイの依頼場面に着目し、分析を行った。

2 調査の概要

本研究では、「地域の日本人住民による外国人住民の自治会加入勧誘」という設定で、日本語母語話者と日本語非母語話者とのロールプレイを実施した。分析対象としたのは、ロールプレイ時の録音・録画データと、ロールプレイ後に行った母語話者・非母語話者双方へのインタビューの録音データである。調査対象者・協力者は以下の通りである。

・調査対象者

日本語教師 以下NST (Native Speaker Teacher) とする

NST1 50代男性 教師歴15年

NST2 30代女性 教師歴3年

NST3 20代男性 教師歴2年

ホストファミリー 以下NSH (Native Speaker Host family) とする

NSH1 50代女性 ホストファミリー歴10年

NSH2 60代女性 ホストファミリー歴4年

NSH3 40代女性 ホストファミリー歴1年

一般母語話者 以下NSG (Native Speaker General person) とする

NSG1 60代男性 会社を定年退職

NSG2 30代女性 学習塾に勤務

NSG3 30代女性 会社員・営業職に従事

母語話者を3グループに分けたのは、日本語教育経験や外国人との接触の多寡がコミュニケーションのしかたに影響すると考えたためである。

・調査協力者…初級後半～中級前半レベルの日本語非母語話者 9名

すべて日本語学校・大学院で日本語を学習している20代～30代の就学生・留学生である。以下の発話データにおいてはNNS (Non-Native Speaker) とする。

両者とも、相手の情報が一切ない状態でロールプレイに臨んだ。開始10分前に、母語話者には自治会の活動の概要を記した「自治会入会のお願い」（筒井（2008: 80）参照）、自治会費の使途や納入方法を記した「自治会費納入のお願い」（都区内某自治会で使用されたものをもとに作成）の2枚の用紙を渡し、自治会の勧誘員としてこれから会う非母語話者のもとを訪れ、自治会への勧誘を行ってほしい旨伝えた。

3 分析と考察

本調査において行ったロールプレイにおいては、母語話者は初対面の非母語話者に自治会入会を依頼し、会費も徴収しなければならない。よって、各母語話者は目的を達するために、さまざまな対人的配慮を行うことが推測される。日常における非母語話者との関わり方が依頼場面の発話にどう影響するのかについて、「自治会入会依頼」「会費納入依頼」の二つの場面における調査対象者（=母語話者）の依頼の発話に焦点を当て、「依頼の回数」「敬語の使用傾向」「婉曲表現の使用傾向」「前後文脈にみられる負担軽減のストラテジー」という観点から分析を行った。

3.1 依頼の回数

「自治会入会依頼」「自治会費納入依頼」の2場面における各調査対象者の依頼の発話の出現回数は表1の通りである（依頼の開始から次の話題までの一続きを1回と数えた）。NST2やNSG2の発話に「自治会入会依頼」に該当する部分が各1回しか出てこないのに対し、NSH2は5回、NSG3は各6回、NSG1に至っては10回も現れている。なぜこのような差が生じたのか。

調査対象者と非母語話者のやりとりを詳細に観察してみると、以下の例1の

表1 依頼の発話の出現回数

	NST1	NST2	NST3	NSH1	NSH2	NSH3	NSG1	NSG2	NSG3
自治会入会依頼	2	1	3	2	5	3	10	1	6
自治会費納入依頼	2	4	3	3	3	5	4	2	5

ように、1回の依頼で非母語話者のはっきりした返答が得られれば、そこで課題は達成され依頼は終了するが、例2のように、調査対象者の依頼に対して非母語話者のはっきりした諾否の反応が得られない場合、課題が達成されないため、依頼が繰り返し行われることがわかる。

- 例1 NST2 : こういうことを、この、自治会という、自治会はします。
 NNS2 : あはい。
 NST2 : で、〇〇さんにも、入って、(笑) もらいたいです、どうでしょうか。
 NNS2 : はい。
 NST2 : あ、いい…
 NNS2 : はい、いいです。
 NST2 : ありがとうございます。
- 例2 NSG1 : で、ぜひこの会にですね、ご賛、賛成をしていただければ(笑)、あの一、ぜひ入会していただけないかなと。…あの一、今までその経験はないですね。
 NNS7 : (沈黙) ええ。
 NSG1 : 今、あの、学生ですか？
 NNS7 : はい。
 NSG1 : そうですね。
 NNS7 : はい、学生です。日本語の学校で勉強している…
 NSG1 : 学校との行き帰りだけで、友達もたくさんいると思うんですけども、せっかくあの、日本へ来たわけですから、日本のふつうの人とね、会話をしたり、仲良くするというね、そういう機会にもつながると思うんですよ。ですから、ぜひ、…この機会にですね、あの一…参加をしていただけないかなと。
 NNS7 : (沈黙)

3.2 表現上の特徴

母語話者の発話のスピードや発音に大きな差異がみられなかったことから、例1、例2にみられるように依頼における表現のわかりやすさが非母語話者の反応に大きく影響していると考えられる。よって、依頼回数の少ない調査対象者と多い対象者の発話に現れた依頼表現に着目したところ、異なる傾向がみられ

た。依頼の回数が5回以下の調査対象者の依頼表現の文末部分は、以下の通りである。

例3 NST1 : 自治会に、入って、ほしいんですね。

例4 NST1 : もし、それでOKならば、こちらに払ってください。

例5 NST1 : 出してもらいたいですけども、

例6 NST2 : 〇〇さんにも、入って、(笑) もらいたいんですが、どうでしょうか。

例7 NSH1 : できたら、この自治会に？入会して、いただきたいと思うんですけど、どうでしょうか。よろしい…？

例8 NSG2 : よかったら〇さんも一まあ入ってもらって一、少しでも日本で楽しく、過ごしてもらえれば(笑) いいかなあって、思うん、だ、けれども。

一方、依頼の回数が8回を超える調査対象者の依頼表現の文末部分は以下の通りである。

例9 NSH2 : 参加していただけたらいいな一と思ひまして。

例10 NSH2 : 自治会に、入会していただけたら、と思ってるんです。

例11 NSG1 : ぜひ参加をしていただけないかと。

例12 NSG1 : ぜひこの自治会にですね、お入りいただけないかと。というふうに思ってるんです。

例13 NSG3 : 参加していただけたらな一と思ってます。

両グループの表現の明らかな相違点の一つは「尊敬語・謙譲語の使用不使用の差」である。前者に「(て)ほしい」「(て)もらう」という表現が目立つのに対し、後者ではすべて「(て)いただく」という表現が選ばれている。なぜこのような相違が現れたのか以下の項でその分析を行う。

3.3 敬語の使用傾向

表2は依頼の際に調査対象者が用いた表現「(て)ください」「(て)ほしい」「(て)もらう (もらいたい/もらえれば等含む)」「(て)いただく (いただきたい/いた

だけたら等含む)」「ちょうだいする」の使用頻度をまとめたものである。「ちょうだいする」は「(お金を) ちょうだいする」という文脈で現れたものである。その他の表現は本動詞・補助動詞双方を含む。^[註1]

表2をみると、依頼において「(て)ください」を使用したのはNST1のみで、「(て)ほしい」の使用もNST1とNST3以外にはまったくみられない。ところが、NST1は全4回の依頼のうち2回、NST3は全6回中3回「(て)ほしい」を使用している。また、「(て)もらう」を使用しているのは、日本語教師以外ではNSG2のみで、他の調査対象者の発話にはみられない。「(て)ほしい」や「(て)もらう」などの使用が、日本語教師3名と一般母語話者1名に偏っていることがわかる。

菊地(1997)では、敬語使用の規準には、上下関係・立場関係・親疎関係があるが、現代日本語の敬語は親疎関係に基づいて運用される傾向が強いと述べている。今回の調査では、調査対象者は協力者と初対面であり、さらに協力者に対して依頼を行わなければならないことを考えると、親疎関係からも立場関係からも、敬語使用が自然な状況である。とすると、日本語教師群は一般的な敬語使用の規準からはずれた話し方をしていることになるが、以下の日本語教師NST3の発話例から意図的にそうしていることが推察される。

例14 自治会って、ご存知ですか、知ってますか？

例15 その会に、今日は、入って、いただき、ほしくて、あのそれがお願いなんですけれども

例16 じゃ、これ、900円、いただき、もらいます。

表2 依頼の文脈における「(て)ほしい」「(て)もらう」「(て)いただく」「ちょうだいする」の使用頻度

	NST1	NST2	NST3	NSH1	NSH2	NSH3	NSG1	NSG2	NSG3
(て)ください	1	0	0	0	0	0	0	0	0
(て)ほしい	2	0	3	0	0	0	0	0	0
(て)もらう	1	3	3	0	0	0	0	3	0
(て)いただく	0	2	0	3	8	12	13	0	6
ちょうだいする	0	0	0	0	0	0	0	0	1

NST3は、一度「ご存知ですか」と言ってから、すぐ間を置かずに「知っていますか」と言い換え、「いただきます」と言いかけて、途中で「ほしくて」「もらいます」と言い換えている。つまり、NST3は相手の反応をみて言い換えたのではなく、初めから意識的に尊敬語・謙譲語の使用を回避していると判断される。これはNST3の日本語教育経験が大きく影響していると考えられる。日本語教育において、丁寧語以外の敬語の指導は初級の最後かそれ以降に行われることが多く、学習者にとって習得の難しい項目として認識されている。日本語教師は現場での教育経験から、調査協力者の日本語能力では尊敬語・謙譲語の使用は理解の妨げになるため、使用しないほうがよいと判断したと推測される。

日本語教師ではないNSG2の敬語の不使用についてはNSG2が以下のように全体に非常にくれた話し方を選択していることから説明できる。

例17 NSG2：知らない人同士だと喧嘩になりやすい、からー。ちょっとしたことでね。だから話し合えればうん、あの一、いっていうことで一、こういう、ものを一町内ではやってるのね。で、よかったら〇さんも一まあ入ってもらって一、こう近所の人たちと一、知り合いになってね、(後略)

発話全体が普通体でなされているため、依頼においても敬語が出現しにくかったと考えられる。その意味で、丁寧体で話しながら尊敬語・謙譲語を使用しない日本語教師群とは不使用の意味合いが異なっている。

今回の調査対象者のうち、上のような丁寧体を基本としない話し方をしているのはNSG2だけであった。親疎関係を考えるとNSG2の敬語不使用は規準からはずれていることになるが、これはNSG2の、子どもを相手とした塾講師という職業的背景がある程度影響していると推測される。

3.4 婉曲表現の使用傾向

3.2で挙げた例をみると、依頼の文末表現には「いただきたい」「いただけますか」「いただけませんか」「いただけたらいいなと思ひまして」「いただけないかと」のように同じ「いただく」であっても文末表現は多様である。また全体の意図としては依頼と受け取れるが、依頼表現と特定できるものがない発話

もみられた。本項では、こうした表現のパリエーションについて、森田・松木(1989)の要求・依頼を示す表現の分類、蒲谷(2007)の「丁寧さ」の原理を参照し、表3のように丁寧度の低い順に配列し、使用傾向の分析を行った。^[註2]

表3をみると、同じ依頼場面であっても、「自治会入会依頼」と「自治会費納入依頼」では、後者のほうが丁寧度の高い表現が多用されていることがわかる。これは、後者のほうがより相手にかかる負担が大きいためだと考えられる。たとえば、NSG1の依頼表現のうち、婉曲さの程度の非常に高い「～いただけるかどうか」「～いただけるかなんですが」はすべて「自治会費納入依頼」の発話に現れており、また「その他」に分類されている、文脈全体で依頼を表示するような発話も「自治会費納入依頼」により多く出現している。一方、日本語教師の使用する依頼表現は全体にバラエティーに乏しく、両場面でも丁寧度あまり変化がない。NST1では、むしろ「～てください」という指示的表現が「自治会費納入依頼」の場面で使用されている。

こうしたことから、日本語教師は他の母語話者群に比べ、非常に直接的な表現を意図的に選択して使用していると考えられる。この特徴も、敬語の使用不使用と同様、相手が日本語能力の充分でない非母語話者であるということを強く意識し、待遇面への配慮よりも非母語話者の理解を優先して表現を選択していることの表れであると考えられる。実際にそのわかりやすさの結果として非母語話者は明確な反応をすぐに示しており、その結果母語話者の依頼を行う回数も少なくなっている。

一方、その他の母語話者には婉曲表現が多用されており、依頼は非常に曖昧かつ間接的な表現で行われている。その究極とも言えるのが、表3で「その他」に分類した、以下のような発話である。

例18 NSH2：まず入って様子を見ていただいて？ええそれでもかまいませんけど。

例19 NSH2：1800円を、あのこれ入会される時に、半年分としてまず、えー納めていただく、よくなってらんです。

例20 NSH3：ごめんなさい(笑)じゃ、1800円、だいじゃぶでしたら、はい、1800円。

例21 NSG2：こういう、実際にね一、それで、お金がかかっちゃうんですよ。少し、えーと一うーん、(2秒) three、あ、300円。per monthだね。うん。で、えっと一げん、

表3 依頼の際に使用された文末表現の種類別回数

	T1	T2	T3	H1	H2	H3	G1	G2	G3
(て)ください	B1								
(て)ほしい(ん)です	A1 B1		A1						
(て)ほしいんですが			A1 B1						
(て)もらい(いただき)たい(ん)です				A1			A1		
(て)もらい(いただき)たいんですが	A1	A1 B2				A1	A1		A1
(て)もらえ(いただけ)ますか		B2	A2 B1			B2	B1		
ちょうどいいですか									B1
(～円)、いいですか			B2						
ぜひ							A1		A2
(て)もらい(いただき)たいと思って					A1				
(て)いただきたいと思うんですが				A1					
(て)いただけたらいいと思って					A1				
(て)もらえればいかなって思うんだけど								A1	
(て)いただけたらありがたいんですが							B1		
(て)いただけたらどうかと思って					A1				
(て)いただけたら(れば)と思います					A1				A2 B2
(て)いただけたら(れば)と思って				A1	B1				
(て)いただけないか(な)と							A6		A1
(て)いただけるかどうか							B1		
(て)いただけるか(どうか)なんですが							B2		
～、どうですか/どうしますか						A2			A1
～、どうでしょうか/どうしましょうか				B2			B2		B2
(～円)、だいじょうぶですか						B2			
その他				B1	A3 B4	B1		B2	
計	4	5	8	6	12	8	16	3	12

現段階で— half halfyear、1800円を、払ってもらおうような感じ。

これらの発話例には「～でもいい」という許可表現や、「～ようになっている／なる」という自分の意志とは無関係に決まっているかのような表現、「～てしまう」というその事実が不本意であるかのような表現が用いられており、個々の表現には「依頼」のマーカと認識できるものがまったくない。母語話者であれば文脈から依頼であると判断できるが、日本語能力が充分でない非母語話者には非常に理解しにくい言い回しであることは容易に推測される。にもかかわらず、非母語話者に対してこうした婉曲表現が多用されたのはなぜだろうか。

ロールプレイ後の調査対象者へのインタビューでは、婉曲表現・敬語表現を多用した調査対象者のうち、「非母語話者の理解度」について、婉曲表現や敬語使用の非母語話者にとっての理解の難易について言及した人はなかった。このことから、婉曲表現を多用した母語話者は、意識的に対人的配慮を優先して婉曲表現を用いていたというよりむしろ、母語話者同士のコミュニケーションを無意識にそのまま非母語話者とのコミュニケーションにも持ち込んでいたのではないかと推測される。そういう意味では、依頼という場面では、対人的配慮に注意が向くあまり、非母語話者が理解できるかどうかという語彙や表現選択のモニターが、日本語教師以外では働きにくくなっていったと思われる。

3.5 前後の文脈にみられるその他の特徴

3.5.1 相手の負担軽減のストラテジー

滝浦(2005)では、「依頼」を相手のフェイスの侵害度の高い行為の典型例として挙げ、「実現可能性を悲観する」と「相手への負荷を最小限にする」というフェイス侵害の軽減ストラテジーの使用について説明している。今回の調査においても、表4のように各発話対象者の依頼場面の発話の随所に、上の二つのストラテジーの使用がみられた。

やはり日本語教師のNST2とNST3にどちらのストラテジーもまったく現れていないのが特徴的である。情報を最小限に抑えて、非母語話者の理解への負担を軽くしようとする日本語教師の意識がここにも表れている。また、「実現可

能性を悲観する」戦略の多い調査対象者は、「相手への負荷を最小限にする」戦略の使用も多いこと、さらには、前項で婉曲な表現の多くみられた調査対象者に、表4のような表現も多く現れていることがわかる。

「実現可能性の悲観」の各表現をみると、全体としては「できれば(できたら)」、「よければ(よろしければ/よかったら)」は、日本語教師以外の全母語話者に共通して現れており、NSH3の「ご納得いただけたら」、NSG1の「賛成をしていただけるということであれば」、NSG3の「ご賛同いただけたら」等も類似性の高い表現である。NST1の「もしOKならば」の表現の特異性が際立つが、この「OK」は「納得」「了承」を非母語話者にわかりやすく言い換えたものと考え、NST1は依頼による相手の負担を軽減しつつ、理解の負担の軽減もできるだけ行おうとしているためにこうした表現を選択したのではないかと推測される。

「相手への負荷を最小限にする」戦略は、具体的には「強制ではない」「いつでもやめられる」という2点に絞られる。しかし、直接的な表現は入会を勧めるという課題に反するため、「必ず参加しなければいけないというものでもない」のような非常に婉曲な表現が選択されており、日本語能力がまだ充分でない非母語話者にとっては複雑で理解困難な文構造となっている。

3.5.2 依頼の際の理由付け

各調査対象者が依頼を行う文脈に着目して比較してみたところ、依頼の直前に現れる理由付けにあたる部分にも異なる特徴がみられた。そこで、各調査対象者の自治会入会依頼と自治会費納入依頼の際の理由述べの有無とその内容について表5にまとめた。

表5をみると、「自治会費納入依頼」については、NSG1以外は、みなほとんど「活動費がかかるので、全員からお金をもらっている」という理由付けを行っており、述べ方にほとんど差がなかった。一方「自治会入会依頼」のほうは、調査対象者によって述べ方にさまざまなバリエーションがみられる。

まず自治会入会を依頼する理由を述べるかどうかという相違がある。理由を述べずに、自治会について説明した後すぐに「入会してほしい」という依頼を行っているのは、NST2、NST3、NSH1、日本語教師と経験の長いホストファ

表4 依頼の際に使用された相手の負担軽減の戦略

	実現可能性を悲観する	相手への負荷を最小限にする
NST1	・もしほんとにOKならば ・もし、それでOKならば	なし
NST2	なし	なし
NST3	なし	なし
NSH1	・できたら ×3	なし
NSH2	・できたら ・できればなんですけど ・よろしかったら ・もしよければ ・もしよろしければ ・もしよろしければなんですけど	・まず入って様子をみていただいて ・様子を見るためにも入っていただいてもよろしいんですけど ・参加していただける部分で参加していただいたんでかまわないんですね ・その方の都合に従って、そこで活動してみたいことがあったりとかこういうのに行ってみたいことがあったときに、参加していただくことも可能です。
NSH3	・ご納得いただけたら ・考えていただかなくちゃいけないんですけど ・それでよければ	なし
NSG1	・できれば ・もしできましたらね ・こういう活動に、賛成をしていただけるということであればですね	・もし参加をしてみてください、自分の期待に、とは違うと。聞いていた話と違うということであれば、自由にやめることも、できます。
NSG2	・よかったら ・ほんとうによく考えてもらっていいと思わんですけれど	なし
NSG3	・もしよろしければ ・もしご賛同いただけたら ×2 ・参加したいなーというふうに、お考えいただけたのであれば	・この自治会って、我々が自主的に作っている団体ですので、必ず参加しなければいけないというものでもないんですね。

*「あの一」「えー」などのフィラーは削除

表5 依頼における理由述べの有無と内容

	自治会入会依頼の理由	自治会費納入依頼の理由
NST1	・住民と仲良くなって街をよくするため	・自治会の活動のためにお金を集める
NST2	なし	・自治会の活動のためにお金を集める
NST3	なし	・活動費として、みんなからもらっている
NSH1	なし	・自治会はみんなから集めたお金で運営されている
NSH2	・住民とつながりをもつため ・困っていることを相談できる ・町の様子がわかる ・イベントを通して友人が作れる	・自治会員の会費で自治会が運営されている
NSH3	・顔がよくわかる ・さまざまな情報が入る ・イベントに参加できる ・わからないことを聞くことができる	・活動費用がかかる
NSG1	・外国人が地域の人と仲良くできる ・日本の文化を知ることができる ・日本での経験を増すことができる	・イベントなどにお金がかかる ・活動費を払えばイベントに参加できる
NSG2	・近所の人と顔見知りだとトラブルを避けることができる ・困ったことがあれば助けてもらえる	・イベント等の活動にお金がかかる
NSG3	・協力してこの街の環境を保っていくため 街づくりに参加してもらいたい	・ミニコミ誌の作成や活動にお金がかかる

ミリーという、属性としては比較的非母語話者との接触の多い人たちであった。その他の母語話者は、みなそれぞれに理由付けを行っているが、中には元の調査紙にあった「より住みやすい街づくりのために」「一人でも多くの方とふれあい」といった記述をそのまま反映させているものもある。NST1の述べた理由はその典型例である。一方、調査紙を離れ、独自の発想で理由付けを行っているのは、NSH2「困っていることを相談できる」、NSH3「わからないことを聞くことができる」、NSG1「日本の文化を知ることができる」「日本での経験を増すことができる」、NSG2「困ったことがあれば助けてもらえる」な

どである。それらに共通しているのは、元の調査紙の文章が住民の義務としての色合いの強い要請のしかたをしているにもかかわらず、「～できる」といった自治会入会による相手のメリットを強調して入会を勧めている点である。また、そのメリットの内容はすべて、母語話者にはふつう当てはまらない、「外国人である」ことに特化したメリットであるという点も特徴的である。日本語教師以外の調査対象者が、いかに相手の状況や心情の推察に心を砕いてコミュニケーションを行っているかが窺われる。

4 まどめと今後の課題

本研究では、依頼場面において母語話者が非母語話者に対して依頼を行う場面の発話に着目し、わかりやすさと対人的配慮という観点から分析を行った。そこで明らかになったのは、次の2点である。

- ①日本語教師群や日本語弱者との接触度の高い母語話者の発話には、「敬語の不使用」「婉曲表現の不使用」という傾向がみられ、相手の理解を最優先しできるだけ簡略な表現が選択されている。
- ②その他の母語話者には、敬語や婉曲表現を多用する傾向がみられ、複雑で語用論的知識がなければ理解困難な発話が多くなっている。その傾向は非母語話者との接触度の高いホストファミリーより接触度の低い一般母語話者のほうが強い。

②の母語話者群の発話の傾向は、依頼場面で対人的配慮を優先し、相手との友好関係を保ちつつ依頼に応じてもらえるよう最大限の努力をした結果だと考えられる。また、前後文脈でも「実現可能性の悲観」「相手の負荷軽減」「相手のメリットの強調」など、さまざまなストラテジーを使用しているため発話量が増え、非母語話者の理解に一層負担がかかっている。その結果、非母語話者の明確な反応が得られず、依頼を繰り返し、ますます発話量が増えるというジレンマに陥っている。

情報の経済性の面から考えれば、日本語教師の言語調整ストラテジーは有効

に働いていると言える。ただ、「初対面の相手への比較的負担の大きい依頼」という今回のロールプレイの役割設定から考えると、母語話者同士の会話であれば日本語教師以外の母語話者の話し方はごく自然であり、むしろ日本語教師群の話し方は日本社会一般のコミュニケーションのあり方から大きくずれている。一般母語話者の許容範囲である自然さを保ちつつ日本語能力が充分でない非母語話者に理解しやすい話し方の可能性について、今後模索していく必要がある。

本研究においては、非母語話者との接触度の異なる3グループの母語話者を調査対象とし、その発話の傾向を比較したが、対象者数が少ないためその傾向を一般化して考えることはできない。また、各グループに特徴的に現れた言語調整がその属性と関わるかどうかは、対母語話者コミュニケーションと比較しなければ正確には把握できない。さらに、非母語話者の反応がどう母語話者に影響したか、非母語話者のインタビューをもとにした非母語話者の理解や印象についての分析も不十分である。

こうした点については、今後研究を進めていきたい。

〈フェリス女学院大学〉

- スクータリデス, A. (1988) 「日本人が外国人と話す時」『国文学解釈と鑑賞』53, pp.118-125. 至文堂
- 滝浦真人 (2005) 『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討』大修館書店
- 筒井千絵 (2008) 「フォリナー・トークの実際—非母語話者との接触度による言語調整ストラテジーの相違」『一橋大学留学生センター紀要』11, pp.79-95. 一橋大学留学生センター
- 西原鈴子 (1999) 「日本語非母語話者とのコミュニケーション—日本語教師の話はなぜ通じるのか」『日本語学』18, pp.62-69. 明治書院
- 前田直子 (2006) 「日本語教育とステレオタイプ」『文学』7(6), pp.139-147. 岩波書店
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『NAFL選書5 日本語表現文型』アルク
- ロング・ダニエル (1992) 「日本語によるコミュニケーション—日本語におけるフォリナー・トークを中心に」『日本語学』11, pp.24-32. 明治書院

注

[注1] …… 以下の例15・16のように不完全なものは数えない。

[注2] …… 表3のAは「自治会入会依頼」、Bは「自治会費納入依頼」、後の数字はそれぞれの依頼を行った際に現れた各文末表現の数を示す。

参考文献

- 岡崎敏雄・長友和彦 (1991) 「日本語教育におけるティーチャートーク—ティーチャートークの質的向上に向けて」『広島大学教育学部紀要』2(39), pp.241-248. 広島大学教育学部
- 蒲谷宏 (2007) 『大人の敬語コミュニケーション』筑摩書房
- 河原俊昭・野山広 (2007) 『外国人住民への言語サービス』明石書店
- 菊地康人 (1997) 『敬語』講談社学術文庫
- 志村明彦 (1989) 「日本語のForeigner Talkと日本語教育」『日本語教育』68, pp.204-215. 日本語教育学会
- スクータリデス, A. (1980) 「外国人の日本語の実態 (3) 日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45, pp.53-62. 日本語教育学会